
野生と生きた 88年

高橋 清 (29C 応化)



スタンレー公園

その5：カナダへの第一歩 (1966年)

10月1日朝、眼が覚めると船は水平で静かであった。船はブリティッシュコロンビア州のバンクーバー島南端にある州都ビクトリア港の沖に停泊していて、海は鏡のように静かだった。朝食に集まった船客は、皆正装で何となく落ち着かない。朝食はごく簡単な食パンと目玉焼き、そしてコーヒーか紅茶がカップに注がれた。食事を早々に摂り終わり部屋に戻ると、船はいつの間にか静かにバンクーバー港に入り、入口に掛かる「ライオンズゲート橋」という高い橋の下を通過して貨物専用の棧橋に止まった。ごく自然に、こともなく入国手続を済ませると、係がてきぱきと日本から持ち込んだ家財道具などの一時保管の手続を終えた。この間、全てが予定されたようなスムーズな作業で、気が付くと入国管理局の外に待つタクシーでホテルに向かっていった。

バンクーバーの都心にあり、当時は市内で最大と言われていた「ホテルバンクーバー」に予約を取っていた。特別な理由はなく、日本で世話をしてもらった旅行者の勧めに従ったままで、部屋は9階の「スイートルーム」と呼ばれる、大きなリビングに寝室2室の大部屋であった。チェックインも滞りなく終わり、ボーイが「荷物はあとで届けるからお先に部屋まで、お出で下さい」と言うので、他のボーイに案内されてエレベーターに乗った。すでに2組ほどの先客があって、我々が入ると直ぐに娘たちが、「Good morning」と言い、慌てて止めようとするので、先に居た客が笑顔で、返事を返してくれ、「どこから来たの?」と英語で聞いてくれ

た。すると驚いた事に長女が、「Japan」と咄嗟に答えたのには、こちらがびっくりしてしまった。日本を発つ前は、自分が下手な英語を教えるより、現地で自然に覚えた方が良いと思い、全く英語の教育はしていなかった。しかし、船で過ごした10日間は、ここまで子供たちを成長させていてくれたのであった。

部屋は予想以上に立派で、出張、外泊が多かった自分自身が経験の無い豪華な物であった。部屋は北に面していて、少し先に「スタンレー公園」が見え、窓のすぐ下の繁華街に面して、日本料理屋らしき店に、日本語で「ゲイシャガーデン」と看板に書かれている。ちょっと驚いたが、一段落してから、久しぶりにお昼はそこに出掛けることになった。いまにして思うと、一寸どうかと思う名前だったが、数年後その店は無くなった。

翌日は日曜日で、姉の嫁ぎ先の知人のさらに知人が長い間バンクーバーにお住まいとの話を伺い、移住の話を伝えておいたところ、電話があって、ホテルまで出迎えいただき、郊外の400mほどの山の上にある大学と公園に案内いただいた。そこは、カナダ先住民の歴史のある小高い山で、バンクーバー市の中心を見下ろす位置にあって、こじんまりとした街の様子が頭にしっかり埋め込まれた。山と海に仕切られた、整ったこの街が益々好きになりそうだった。

こうしてバンクーバーの休日は終わり、いよいよ明日が面接となる。日本にいる間に技術部長のお宅に電話をして、「面接の確認をするように」との連絡を受け取っていた。夜になって

電話をかけると、翌朝迎えに来るのでホテルで待つようにとの指示を受けた。旅を楽しんでいる気分も、これで引き締まった気がして、その夜は在日中に受け取っていた会社概要などを取り出して、英語の練習も兼ねて少し勉強した。

当日の朝は5時頃に目を覚まし、独りで暫くホテルの周りを歩いて気分転換を図った。約束の9時にホテルの駐車場で待つと、一台の車が傍に止まり、「Are you Mr. Takahashi?」と聞かれ、直ぐに技術部長であることが解った。助手席に乗り込み、自己紹介が終わると、車は出発した。それから45分ほどのドライブで何を話したかは全く記憶にない。今もアリアリと覚えているのは、緊張で周りの風景を見る余裕も全く無く、部長からは、カナダを選んだ理由や大学時代に受けた基礎教育、技術社会での仕事の範囲などの質問を受けた程度で、緊張した空気のまま、バンクーバーの隣町のPort Moodyという港町の入江末端にある小さな工場に到着した。工場の大きさは野球場一つくらいで、反応窯3基のある建屋は、日本のそれとそっくりで親近感の持てる設備だった。

部長室の前には6畳ほどの広さの会議室があり、間もなく、工場長と総務部長が来て、技術部長と計4名で会話が始まった。面接と言えば日本式の緊張した雰囲気、僕一人が3名の面接官に対峙して質疑応答を受ける場面を想定していたが、実は4名がテーブルを囲んで座り、雑談形式という感じであった。僕の生い立ちと学歴の説明が終わると、日本ライヒホールドでの職種、扱った製品の種類、そして明確に記憶に残っている質問は、「カナダライヒホールドに入ったらどんな仕事がしたいか」という僕の意欲を聞かれたことである。僕はカナダに渡来した一番の動機、技術者としての自分の能力を試したいこと、そして私的には家族で自然に触れながら山登りもできる生活を送りたいことを話した記憶だけで、今にして思うと全く気張らない、自由気ままな会話だったと思う。

30分ほど雑談式に話が続いた後、3名が小声で早口で何か話し合った後、部長が、「研究室

の技術者として採用したいが異存は無いか」といきなり聞かれた。正直なところ、あまりにも性急なことにいささか動転して、異存は無くても、勤務条件や勤務時間等を少し詳しく知りたいと頼んだ。給料については僕は在日中もあまり気にしたことはなく、この新しい任地であるカナダでの標準の雇用条件などは全く知識がなかった。工場長と総務部長は会話を離れ、技術部長と二人、細かい勤務条件などを聞かされた。給料については、まず仮採用の条件で、3か月以内に正式採用とする前提で提示されたのが、在日当時の給料の5割増し程度だったことを記憶している。僕はカナダでの生活費がどの程度かかるのか、全く調査していなかったため、その給料が合意できる範囲かどうかは不詳という状態でいたことに初めて気付いた。まずは、職を持つことが最優先で、その後は、この社会の平均以内であれば、後は自分で励んで収入を上げられる、というのが僕の信念であった。そしてその気持ちが一層強くなったのは、新しい働き場である研究室を見学した後である。研究室の設備は日本で経験した働き場と全く同等、大きさ、研究員の数、設備のレベルなど、明日からすぐに仕事に取りかけられる自信が生まれるほどの共感の持てる職場であった。研究員は数名で、ほぼ僕と同年配で、楽しんで仕事に励めそうな雰囲気の職場であったことは、何よりも僕の希望と意欲を掻き立てた。

そしてランチを近くの中華料理店でご馳走になった。その後、事務所の職員から住居の提案があり、最近入社した人が入居した新しいアパートにまだ部屋がいくつかあると、車で連れて行ってもらい、部屋を見て気に入ったのでその場で契約した。すると、会社のライトバンを使っての引っ越しも明後日に決まり、さらに、子供2人の小学校と保育所の手配などが必要と判断されて、工場長から2週間の有給休暇を与えられた。その間に何らかの援助や助言が必要な場合に連絡してもよい、特定の役員の連絡先まで決めていただいたのである。

こうして昼過ぎには生活の基本が決まり、カ

ナダでの最初の生活地区が、瞬く間に決まったことを、妻はまだ知らないまま、子供たちを連れて1時間余を町はずれのスタンレー公園の入口まで歩いていたのである。僕たちの家族の将

来を決める手続きがこうして、カナダ上陸後3日で決まり、そして3週間目からいよいよ本格的にカナダでの生活が始まることになった。
（「その6」に続く）



新しいアパートの遊び場で遊ぶ娘たち



新築のアパートのキッチン



友人から借りた自転車に乗る娘たち



早速近所の住民と友達に